

令和2年度学校評価結果報告書

(中間評価)

広島県立呉特別支援学校

(本校)

令和2年度自己評価シート(中間評価)

校番	112	学校名	広島県立呉特別支援学校	校長氏名	古谷 晶江	全・定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	-----	-----	-------------	------	-------	-------	---

学校経営目標				
達成目標	本年度行動計画	評価	理由	担当部等
1 児童生徒の学力の向上【知】				
児童生徒の学力の向上に向けての教育課程編成の推進	新学習指導要領をもとに、教育課程編成についての研修を、学部内や縦割りグループ等で行う。	A	肯定的評価4「達成」及び3「やや達成」が 53%という結果が得られたため。	教務部
児童生徒の主体的に学習に取り組む態度の育成に関わる授業改善の推進	講師を招聘して、実態把握や根拠のある目標設定の取り組みを進め、教職員の専門性と授業力の向上を図る。	-	実施予定だった研修が中止及び延期になっており、実施できた取組が少ないため、中間のアンケートの時期を遅らせている。	教育研究部

【評価結果の分析】

- ・全学部通してアンケートの回答が3「やや達成」と2「やや未達成」の二つの評価に集中していた。縦割りの研修会が計画どおり実施でき他学部の教育内容への理解ができたという意見が多数挙げられた。反面情報交換のみで教育課程等の内容の改善点についてまでは深められていないという意見もあった。新型コロナウイルス感染症防止対策による学校全体の大幅な日程変更により学部研修の計画を縮小せざるを得なかったことも要因の一つと推察する。
- ・学部で少人数グループを編成し、国語科に関する指導内容や支援等の問題解決に向けての話し合いを進めている。実施予定であった、研修会(5時間程度)が中止になっている。

【今後の改善方策】

- ・新型コロナウイルス感染症防止対策による様々な業務増を踏まえ、計画的に各学部で教育課程の改善のために検討を深め学部間の情報共有を随時行い令和3年度教育課程や年間指導計画へ反映させていく。
- ・中止になった研修会の代わりに9月 25 日に講師を招聘して実態把握についての研修会を実施した。さらに取組を進め、11 月に中間アンケートを実施し、達成目標の中間評価を行う。年度当初の計画よりも研修時間が短くなっている分、アンケートを取る等して効率的に研修会を進めていく。

2 児童生徒の豊かな心の育成【徳】				
生徒指導上の諸問題対策の推進	問題行動の未然防止、早期対応に向け、組織的対応を図る。	A	中間評価アンケートの肯定的評価5「とてもそう思う」と4「そう思う」が 81.25%だったため。	生徒指導部
児童生徒の能力や可能性を最大限に伸ばす教育活動	児童生徒に各種コンクール、大会、作品展等を紹介し、積極的に応募・出展を呼び掛ける。	B	各種コンクール・大会への児童生徒作品応募が中 1 回、高 3回あった。	全学部

【評価結果の分析】

- ・中間評価アンケートにおいて、設問①『実際に児童生徒の問題行動への対応や未然防止、初期対応に生かすことができるように思いますか。』と②『児童生徒への指導や対応について新しい内容や詳しく知ること、よりよい指導や対応ができるように思いますか。』の肯定的評価5「とてもそう思う」と4「そう思う」の合計が 81.25%であり、研修会により各教職員の認識や組織的な対応の意識の向上を図ることができた。

- ・今年度は、コロナウイルス感染症の影響により、例年開催されている大会等が中止となっているため、応募・出展の機会が減少している。中学部では今年度新たに中学部第3学年が「広島県緑化ポスター原画コンクール」の作品制作に取り組み応募した。高等部では、今年度新たに「献血の推進」、「愛鳥週間」のポスターや「肢体不自由のある人のアート」などの作成に取り組み応募した。今回応募した生徒作品の中から、「広島県緑化ポスター原画コンクール」では佳作が1名、「愛鳥週間」では入選1名、佳作8名が入賞した。

【今後の改善方策】

- ・今後の人権教育研修会や生徒指導部校内研修会においても、教職員の資質・技量の向上や組織的対応力の向上を図っていく。
- ・例年取り組んでいる「ことばのかけはし優秀作品コンクール」に全学部が応募するとともに小・中学部は昭和町づくりセンターで開催される「秋の文化祭」に出品する。また、その他のコンクール等にも積極的に応募・出展できるように引き続き各学部で呼び掛けを行う。

3 児童生徒の健康・体力の向上【体】				
児童生徒が将来的に、望ましい食行動・食習慣を身に付	児童生徒の実態に応じ、摂食（咀嚼・嚥下）、偏食等、食に関する個々の目標を設定し、目標達成に向けて取り組む。	D	個々の児童生徒の目標達成率が 28.6%であった。口腔ケアを含む食に関する取組の一環として校内医	保健安全部

け、健康の保持増進を図る教育活動	療的ケア研修と関連付けて、職員研修を実施した。
------------------	-------------------------

【評価結果の分析】

・達成率は学部や学級によってばらつきがあるが、個々の児童生徒実態に応じて1年間を見通しての目標設定をしているため、継続して取り組む。前期は新型コロナウイルス感染症に関わる臨時休業等で、十分な取組ができていない状況である。摂食や口腔ケアに関わる研修は、取組に生かせる内容であった。

【今後の改善策】

・達成できていない児童生徒が多いが、段階的に目標達成に近づいている。未達成の児童生徒については、達成できない原因を分析し、必要に応じて支援の方法の見直しを行うよう保健安全部と担任で連携する。また、それぞれの課題に応じて、栄養教諭や養護教諭を中心に保健安全部より課題解決に必要な情報提供や取組の助言等を行う。達成できている児童生徒については、継続して指導するとともに、目標のステップアップにも取り組んでいく。

4 自立と社会参加を目指し、地域貢献できる力の育成

社会的自立に向けた取組の充実	作業学習等で身に付けた知識、技能及び態度等の評価及び資格認定を受けることを通して、生徒の将来の職業的自立に向けた力の一層の向上を図る。	B	「チャレンジ呉！」面接部門は、前年より上位の級を取得する割合が上昇した。幅広い生徒が受検することができた。	進路指導部
呉特別支援学校の情報発信	他分掌との連携を行いながら、ホームページ情報を適宜更新し、内容の充実を図る。	A	更新回数 80 回以上(9月10日現在)のため。	総務部
地域の教育関係者を対象とした研修会・巡回相談(研修協力)の充実	本校のセンター的機能の役割を果たすため、地域のニーズを把握し、それらを反映した研修会を行う。	—	未実施のため評価できない。	教育相談部

【評価結果の分析】

・特別支援学校技能検定については、コロナウイルス感染症の影響で校内で自在ぼうき、テープ拭き、ワープロのみの実施となった。受検した生徒及び種目については、10人15種目であり、上位の級の取得率は75.3%であった。昨年度と同じ種目を受検することにより、上位級を取得する生徒が増えている。受検に向けた練習の積み重ねが、上位級取得につながったと考えられる。また、検定の基本である準備等の指導の徹底が再度必要である。

・校内検定「チャレンジ呉！」面接部門については、高等部の生徒減があるものの、受検者数は昨年と同じく36人だった。上級の取得率は63.9%で、昨年より上昇した(昨年度53.8%)。昨年に引き続き受検した生徒は19人で、昨年度より上位の級の取得率は31.8%であった(昨年度66.7%)。今年度は配慮事項を最低限にして審査を厳しく行った。またiPadを使用して支援をするなど受検への工夫が見られた。さらに、より生徒の実態に応じた配慮として、質問項目の限定や、同時に複数の質問をしないとといった工夫も見られた。継続した練習に加え、これらの工夫・配慮が、上位の級の取得率の上昇につながったと言える。

・新型コロナウイルスの影響もあり、前半はG-suiteをはじめとしたオンラインでの教材配付やお知らせ等を行った。児童生徒の家庭に向けた情報発信等を利用する機会が高まり、9月10日現在で更新回数80回以上の結果となった。

・実施できなかったため、学校紹介用スライドを作成し、ホームページに掲載するとともに、教育相談時に授業の様子等の動画を視聴できるようにした。

【今後の改善策】

・特別支援学校技能検定については、引き続き、生徒のスキルや課題を把握するとともに、基本の徹底と練習に継続して取り組ませ、日常の指導の充実や改善に取り組んでいく。

・校内検定「チャレンジ呉！」面接部門については、日程や生徒の配慮事項に関わって、若干担任と面接官・審査員の打ち合わせ不足の面もみられたので、事前の連携・確認を十分行うようにする。

・特別支援教育コーディネーターの巡回相談の記録や巡回相談アンケートの質問項目「もっと相談したかった内容や疑問に思われたこと」について、分掌内で共有し、今後どのような研修会を企画したらよいか、次回の巡回相談等でどのような助言等ができるかなどを検討するとともに、校内の取組をセンター通信等で情報発信する。なお、研修会の実施方法については、オンライン研修を含めどのような方法ができるか分掌内で再検討し、必要に応じて関係分掌と連携を図りながら企画・実施する。

・これまで公開されていた行事や研修・研究会などを補完できるようオンラインを利用した開催等の検討や、情報コンテンツを分掌と連携していき、ホームページの充実を図り情報発信していく。

5 組織的・効率的な業務の遂行

「子どもと向き合う時間」の確保の実感	教職員が業務改善に向け、意識的、主体的、組織的に取り組むことを通して、児童生徒と向き合う時間を確保し、モチベーションを高める。	B	39%が肯定的に捉えている。中間期評価に定めた基準表の基準値内であるため。	学校衛生委員会
--------------------	---	---	---------------------------------------	---------

【評価結果の分析】

・アンケートによる評価では、昨年度末の結果よりも6ポイント増加し、B評価ではあるがC評価に近い数値である。年度当初に掲げた3点の取組方針について、分掌内では比較的具体的な取組が出されているのに対し、個人ではその実行感を感じていない意見が多かった。3点の取組方針の内、「30分会議の推奨」は比較的、個人意見の中でも評価は高かったが、「サーバデータの共有」、「教材教具の共有」については、その実行感は低い意見が多かった。個人の取組は7割強が、何らかの取組を実行しており、一番多かったのは、業務のスケジュール管理であった。年度当初の臨時休業中の児童生徒への学習保障対応や新型コロナウイルス感染症対策によりカリキュラムの変更や行事、研修会の見直し等、いつもとは異なる業務が負担感にもつながっていると分析する。

【今後の改善方策】

・自由意見の中から、「サーバデータ」及び「教材教具」の共有について実行感を感じていない教職員が多くいることから、この2点に絞って取組を進めることとする。自由意見の中には、共有の困難さについての意見は多かったが、具体的な改善案まで踏み込んだ意見がなかったことから、委員会で課題と解決案を募り、学校全体で行うこと、各部署の小単位で行えること等整理し実行可能な案から進める。

令和2年度自己評価シート(中間評価まとめ)

校番	112	学校名	広島県立呉特別支援学校	校長氏名	古谷 晶江	全・定・通	本・分
----	-----	-----	-------------	------	-------	-------	-----

1 評価結果の分析

(1) 児童生徒の学力の向上【知】

・全学部ともアンケートの回答が「やや達成」と「やや未達成」の評価に集中した。縦割り研修会が計画どおりでき、他学部の教育内容の理解ができたという意見が多数あった。反面情報交換のみで教育課程等の内容の改善までは深められていないという意見もあった。
・学部で少人数グループを編成し、国語科に関する検討・話し合いを進めている。予定していた研修会を中止せざるを得なかった。

(2) 児童生徒の豊かな心の育成【徳】

・アンケートにおいて、肯定的評価「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が 81.25%であり、研修会により各教職員の認識や組織的な対応の意識の向上を図ることができた。

・中学部では中学部第3学年が「広島県緑化ポスター原画コンクール」の作品制作に取り組み応募した。高等部では、「献血の推進」、「愛鳥週間」のポスターや「肢体不自由のある人のアート」などの作成に取り組み応募した。応募作品の中から、「広島県緑化ポスター原画コンクール」では佳作が1名、「愛鳥週間」では入選1名、佳作が8名の生徒が入賞した。

(3) 児童生徒の健康・体力の向上【体】

・達成率は学部や学級によってばらつきがあるが、児童生徒実態に応じて1年間を見通しての目標設定をしており継続して取り組む。前期は臨時休業等で十分な取組ができていない状況である。摂食や口腔ケアに関わる研修は、取組に生かせる内容であった。

(4) 自立と社会参加を目指し、地域貢献できる力の育成

・特別支援学校技能検定は、コロナウイルス感染症の影響で、自在ぼうき、テーブル拭き、ワープロのみの在籍校実施となった。上位の級の取得率は 75.3%であった。上位級を取得する生徒が増えている。受験に向けた練習の積み重ねが、上位級取得につながったと考えられる。校内検定「チャレンジ具！」面接部門は、上位級の取得率は 63.9%で、昨年より 10 ポイント上昇した。今年度は配慮事項を最小限にし、iPad を使用して支援をするなど受検への工夫が見られた。継続した練習に加え、これらの工夫等が、上位の級の取得率の上昇につながった。

・新型コロナウイルスの影響もあり、前期は G-suite を始めとしたオンラインでの教材配付等を行った。児童生徒の家庭に向けた情報発信等の利用が高まり 9 月 10 日現在で更新回数 80 回以上の結果となった。

・就学区域の小中学校等に向けた研修会が実施できなかったため、学校紹介用スライドを作成し、ホームページに掲載するとともに、教育相談時に授業の様子等の動画を視聴できるようにした。

(5) 組織的・効率的な業務の遂行

・3点の取組について、分掌では具体的な取組が行われているのに対し、個人ではその実行感を感じていない意見が多かった。「30 分会議の推奨」は評価が高かったが、「サーバデータの共有」、「教材教具の共有」は、実行感は低かった。個人では7割強が取り組んでおり、一番多かったのは業務のスケジュール管理であった。臨時休業中の児童生徒への学習保障対応や新型コロナウイルス感染症対策によりカリキュラムの変更や行事、研修会の見直し等の対応業務が負担感にもつながっていると分析する。

2 今後の改善方策

(1) 児童生徒の学力の向上【知】

・新型コロナウイルス感染症防止対策による様々な業務増を踏まえ、計画的に各学部で教育課程の改善のために検討を深め学部間の情報共有を随時行い令和3年度教育課程や年間指導計画へ反映させていく。

・9月に講師を招聘して実態把握についての研修会を実施する。さらに取組を進め、11月に中間アンケートを実施し、達成目標の中間評価を行う。年度当初の計画よりも研修時間が短くなっている分、アンケートを活用し効率的に研修会を進めていく。

(2) 児童生徒の豊かな心の育成【徳】

・今後の人権教育研修会や生徒指導部校内研修会においても、教職員の資質・技量の向上や組織的対応力の向上を図っていく。

・「ことばのかけはし優秀作品コンクール」に全学部が応募するとともに小・中学部は昭和町づくりセンターで開催される「秋の文化祭」に出品する。また、その他のコンクール等にも積極的に応募・出展できるように引き続き各学部で呼び掛けを行う。

(3) 児童生徒の健康・体力の向上【体】

・未達成の児童生徒については、その原因を分析し、必要に応じて支援の方法の見直しを行うよう保健安全部と担任で連携する。また、それぞれの課題に応じて、栄養教諭や養護教諭を中心に保健安全部より課題解決に必要な情報提供や取組の助言等を行う。

(4) 自立と社会参加を目指し、地域貢献できる力の育成

・特別支援学校技能検定については、引き続き、生徒のスキルや課題を把握するとともに、基本の徹底と練習に継続して取り組ませ、日常の指導の充実や改善に取り組んでいく。校内検定「チャレンジ具！」面接部門については、日程や生徒の配慮事項に関わって、若干担任と面接官・審査員の打ち合わせ不足の面もみられたので、事前の連携・確認を十分行うようにする。

・特別支援教育コーディネーターの巡回相談の記録や巡回相談アンケートにある要望等について分掌内で共有し、オンライン研修等研修会の方法・企画や助言内容の工夫等を検討・実施するとともに校内の取組をセンター通信等で情報発信する。

・これまで公開されていた行事や研修・研究会などを補完できるようにオンラインを利用した開催等の検討や、情報コンテンツを各分掌と連携していき、ホームページの充実を図り情報発信していく。

(5) 組織的・効率的な業務の遂行

・「サーバデータ」及び「教材教具」の共有について実行感を感じていない教職員が多いため、この2点に絞って取組を進める。意見の中には、共有の困難さについての意見は多かったが、具体的な改善案まで踏み込んだ意見がなかったことから、委員会と課題と解決案を募り、学校全体で行うこと、各部署の小単位で行えること等整理し実行可能な案から進める。

3 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策(学校関係者評価実施後に記入する。)

・アンケート評価を評価基準としている項目について肯定的評価の率を基本とするが、児童生徒の達成状況等も踏まえて総合的に評価する。

・新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため、学校の教育活動や研修等を中止せざるを得ない状況だからこそできる取組を充実させていく。

・評価項目に係る評価のみではなく、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策で制限されているなかでも、学校が工夫して取り組んでいることも評価の中に加筆していく。

令和2年度学校関係者評価シート(中間評価)

令和2年10月22日

校番	112	学校名	広島県立呉特別支援学校	校長氏名	古谷 晶江	全・定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	-----	-----	-------------	------	-------	-------	---

評価項目	評価	理由・意見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	A	・「肯定的評価」で評価するだけでなく、できるだけ具体的な行動を目標とし、達成率を指標にできるよう考えてはどうか。
計画の進捗状況の評価の適切さ	B	・コンクールが中止となっている状況ならば、校内コンクール等を企画・実施できるチャンスと捉え、実施することが可能ではないか。
目標達成に向けた取組の適切さ	B	・新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため、研修会を中止せざるを得ない状況だからこそできる研修がある。ICT等、環境が整いつつある中で、積極的な試行をしていくべきである。 ・実際には様々な取組(校内でのICTを使って複数会場の研修)を行われている。そのことが評価に現れるよう工夫されたらよい。
評価結果の分析の適切さ	A	・達成率が低い項目について、その要因は何かを分析し、後半の取組につなげていくこと。個人目標の達成率を評価する場合、その妥当性について吟味が必要である。 ・児童生徒の目標達成率のみで評価するとうまく評価できないかもしれない。目標達成に向けた取組過程が評価に加味できたらよい。 ・地域の教育関係者を対象とした研修会は実施できていないが、特別支援教育コーディネーターが地域校に出かけて支援・助言することは、今の状況のなか評価できる。
今後の改善方策の適切さ	A	・オンラインでの情報発信や研修等の企画はどのような手順で、どこが主体として行っているのか担当を明確にしていく。 ・業務改善の取組において教材教具の共有については、長年、課題とされている。「なぜ共有できないのか」を分析してみなければ課題解決にならないと考える。
総合評価	A	・概ね取組について評価できる。 ・様々なことに取り組んでいることを加筆することで、より具体的な取組を知ってもらおうと良い。